The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	1848年革命期ハンガリーの政治喜劇
Author(s)	岡本, 真理
Citation	言語文化研究. 2018, 44, p. 263-281
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68024
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

1848年革命期ハンガリーの政治喜劇[1)]

岡　本　真　理

Magyar politikai vígjátékok az 1848–as forradalom idején

OKAMOTO Mari

Az újkori Magyarországon a nemzeti irodalom kialakulásának egyik fontos része volt a drámairodalom fejlesztése. Történelmi tragédiák, illetve népies vígjátékok（népszínművek）mellett a politika egyre erősödő befolyásának köszönhetően már az 1840–es években megszülettek a forradalommal kapcsolatos vígjátékok is, amelyek a cenzúra eltörlésével szabadon fejezték ki a radikális politikai eszméket. A forradalom bukását követően azonban azonnal be is tiltották ezeket a műveket. Jelen tanulmányban e rövid életű drámairodalomból a korszakot képviselő öt művet emelek ki, ezek szerzőit és cselekményeit mutatom be, majd a szereplői struktúrában, életképdíszletben, valamint a mondanivalójukban rejlő közös vonásokat vizsgálom. A tanulmány záró részében kimutatom, hogy a magyar politikai vígjátékok a korabeli francia és osztrák drámákhoz hasonlóan az irodalmi romantikán túlmutatnak, és már az irodalmi realizmus előfutárainak is tekinthetők.

キーワード：ハンガリー文学，1848年革命，政治喜劇

1．はじめに

近代ハンガリーにおける国民文学運動は，18世紀末，そもそもハンガリー語で文学作品が書かれることがまだほとんどなかった状況から始まった。ハンガリー語文学は，19世紀前半には，新語創作や外国文学の翻訳によるハンガリー語の近代化，また新聞・雑誌などの定期刊行紙の普及および読者層の拡大とともに大きく発展した。同時期，ヨーロッパ各地で発掘・注目された民族叙事詩への羨望もまた，国民文学確立への精神的原動力となった。さらに，文学活動は韻文詩の創作にとどまらなかった。ハンガリー語演劇を普及させ，貴族から庶民まで広い階層

1）本稿は，科学研究費補助金基盤研究C課題番号15K02413「国家変容と国民形成運動に関する動態的研究：近代ハンガリー文学における「民衆」」（研究代表者：岡本真理）による研究成果の一部である。また，日本ウラル学会第44回研究大会（2017年7月8日名古屋大学）における口頭発表の内容を発展させ，まとめたものである。

を取り込む劇場という空間において国民文学を形成することも，また重要な目標になった。1837年にはハンガリー語で演劇を行うための国民劇場がペシュトに設立され，ハンガリー語オリジナル劇作品を創作することが，いわば国家プロジェクトとして始動した。こうして1830年代から1848年革命までの改革期のハンガリーでは，歴史悲劇や民衆喜劇といったジャンルの作品が次々と生み出されていった[2)]。また，近代ハンガリーの国民文学運動は民族的自治への要求と並行して発展したことから，演劇作品においてもまた，1840年代に入ると政治喜劇が登場し始める。

本研究ノートの目的は，1848年革命期ハンガリーの政治喜劇のうち，今日に残された数少ない貴重な作品およびその作者について，できる限り詳しく紹介することである。これらは革命期というごく短い特殊な時代状況を反映した作品であり，また革命敗北後に上演が禁止されただけでなく，それ以降今日に至るまで実際に上演されることはほとんどない。しかし，そのどれもが革命期に人気があったことから，これらの作品を通して刻々と変化する当時の社会情勢やそこに生きた人々の関心や考え方を生き生きととらえることができると考える。本稿では，作品に描かれた革命というテーマにおける対立構造を分析し，その特徴を検討する。さいごに，その特徴を踏まえて，ハンガリー文学史においてこれらの喜劇がどのように評価されうるかについても考察を行う。

また，これらは検閲を免れた作品であることも重要な点である。文学作品への検閲という観点から見て，1840年代は近代の中でも特殊な位置づけにある。ハプスブルク君主国の検閲制度は，君主の交代や政治状況に応じて多少の変化はあるものの，近代を通じて概して厳しいものであった[3)]。しかし，1840年代に入ると急激に検閲が緩和し，1848年3月15日，ペシュトにおける革命の勃発とともに検閲は完全に廃止された。そして，1年半後のハプスブルク独立戦争（以下，自由戦争）の終結とともに，ふたたび君主国による厳しい検閲制度が復活した。このわずか10年足らずの期間が，ハンガリーの長い近代において検閲に縛られない自由な政治的表現が可能になった唯一の時期だったのである。

2．1848年革命期の5つの政治喜劇

革命期の政治喜劇は，1849年8月にハンガリーが敗北するまで，ペシュトの国民劇場を中心に上演された。しかし，これらは新絶対主義体制の到来とともに禁止となり，上演はおろか印

2）改革期，特に1837年の国立劇場設立に続く10年間にハンガリー語演劇が急速に発展した様子については，拙稿「近代ハンガリーにおける国民演劇運動の発展―国民劇場の黎明期―」『言語文化研究』第42号（2016年）pp.43–60. にデータとともに具体的に論じた。

3）18世紀マリア・テレジアの時代の検閲はイエズス会の手に一元化されていたが，ヨーゼフ2世時代に教会から国家へと権限が委譲された。啓蒙専制君主ヨーゼフ2世のもとで開放的になった検閲は，その死後，18世紀末から19世紀の初頭にかけて反動化，厳重化した。1830年代改革期に入り，ハンガリー議会の要求を受けて1839年にハンガリー王国内の検閲はウィーンの警察庁から切り離され，ハンガリー総督府に委任された。こうして検閲がハンガリー人官吏の手に渡ったことで，1840年代には政治的表現に関する監視は大幅に緩和されることとなった［Fülöp 1993: 42］。

刷物としても目に触れることのできない“まぼろしの戯曲”となった。本稿では，改革期の政治喜劇のさきがけとなり同時代に影響を与えたNagy Ignácの作品と，Kerényiが編集・出版した革命期政治喜劇集[4)]に収録された4つの作品の，あわせて5作品を扱う。これらの作品はいずれも1840年代に発表された。①と②は革命前に初演され，特に人気があり繰り返し上演された作品である。③④⑤は1848年3月15日にハンガリーで革命が勃発した後に初演を迎えた作品である（以下，本文中では作品①～⑤と表記する）。

① **Nagy Ignác,『地方選挙（Tisztújítás）』**（1842年）
② **Eötvös József,『平等ばんざい（Éljen az egyenlőség）』**（1840年作，1844年初演）
③ **Szigeti József『3月の日々のある判事（Egy táblabíró a márciusi napokban）』**（1848年10月14日初演）
④ **Dobsa Lajos『3月15日（Március Tizenötödike）』**（1848年12月18日初演）
⑤ **Obernyik Károly『ウィーン革命の中のハンガリー人亡命者（Magyar kivándorlott a bécsi forradalomban）』**（1849年6月15日初演）

これら以外にも，今日活字として残っていないものの，いくつかの政治喜劇が同時期に創作され上演されたことがわかっている。代表的な作品はVahot Imreのもので，彼は政治喜劇を数本書き，ペシュトだけでなく，当時ハンガリー議会のあったポジョニ（現在スロヴァキアの首都ブラチスラヴァ）などでも上演され成功している。今日ではVahotは改革期に新聞編集，特に「流行紙（divatlap）」とよばれる大衆紙のひとつ『ペシュト流行紙（Pesti Divatlap）』に携わり，文学史ではその編集助手として詩人Petőfi Sándorを雇用しパトロン的存在であったことで知られるが，これと同時に1840年代にもっとも多くの政治喜劇を書きヒットさせた劇作家でもあったのである。『国会ホテル（Országgyűlési szállás）』（1844）や『ふたたび地方選挙（Még egy tisztújítás）』（1845）などの作品がある。これらは活字出版されず，現在でも後世の手によって写された手書き台本が残っているのみである。また，地方都市で上演された演劇作品については，そのタイトルが残るのみで，作品自体は現存しない[5)]。

次章では，前述の5作品を年代順に取り上げ，まず作者について解説し，次に作品のあらすじを紹介する。4章では，この5作品にみられる共通項を抽出し，個々の要素について詳述する。5章では革命期の作品に特有であり本質的テーマである「階級間対立」と「政治的対立」について，これらがどのように描かれているかを分析する。さいごに6章では，これら革命期

4）*Színművek 1848–1849–ből.* A magyar dráma gyöngyszemei. 9. kött. Válogatta Kerényi Ferenc, Unikornis kiadó, 1998.

5）地方都市で上演された革命期の政治喜劇作品については，以下の作者の名前とタイトルが分かっている。Fodor Pálの『ハンガリー義勇兵（Egy magyar önkénytes）』(Nagyvárad), Szuper Károlyの『集団民衆蜂起（A tömeges népfelkelés）』(Kecskemét), Ökröss Bálintの『自由，平等（Szabadság, egyenlőség）』(Debrecen), Dózsa Dávidの『3月の日々（Márciusi napok）』とCsörgey Kiss Dávidの『3月15日（Március 15–ike）』(Kolozsvár）がある［Kerényi 1990: 362］。

の政治喜劇がハンガリー文学史の中でどのような位置づけにあるのかを考察する。

3．作品および作者の紹介

① Nagy Ignác,『地方選挙（Tisztújítás）』（1842年）

Nagy Ignác（1810–1854）
ハンガリー西部の町ケストヘイでフェシュテティチ家に仕える貴族の家庭に生まれる。成人するまでドイツ語を母語としていたが，その後ハンガリー語で執筆活動を始める。1830年代半ばからペシュトで数多くの新聞や流行紙とよばれる政治色の強い文芸誌の編集・執筆に携わる。風刺のきいた記事で人気を得る一方，劇作品を翻訳し，自ら喜劇の執筆にも取り組む。『地方選挙』は当時大ヒットした[6)]。

【あらすじ】

地方の町で副知事の選挙が行われる。町の役人 Tornyai は，美しく若い未亡人 Aranka と幼馴染み。Aranka に心を寄せ，結婚を望む現役の副知事 Farkasfalvi とペシュトの弁護士 Heves が立候補する。2 人は同時に Aranka に求婚するが，彼女は「3 日後の選挙で副知事に当選した人と結婚する」と公言する。Aranka は同時に，義兄の町医者 Langyos が女中の尻を追い回しているのを目撃して咎め，妻（Aranka の姉）に知られたくなければ自分の言うことを聞くように指示し，義兄を完全にコントロール下に置く。

選挙運動が始まり，Farkasfalvi は恋敵 Heves の足を引っ張ろうと，Heves が投宿する宿のユダヤ人主人を仲間に引き入れる画策をする。しかし，宿の主人は「Heves はユダヤ人解放を訴える政治家だから彼を支持する」と言って断る（それに対して Farkasfalvi は激しいユダヤ人差別主義者として描かれている）。一方，地元の貧しい小貴族たちは Farkasfalvi を訪れ，「Heves が貴族間の不公平をなくすと言うのでそちらに投票しようと思う」と話す。これに対し，Farkasfalvi は「奴は農民も含めたすべての人の平等を主張し，貴族の免税も借金の免除もなくそうとしているのだ」と教えると，貴族たちは「農民と平等などありえない」と態度を変えて Farkasfalvi に投票すると約束する。

Farkasfalvi は Heves が優勢と聞き，また Heves も Farkasfalvi を勝たせないために，お互いが票を割ろうとして Tornyai を立候補させることにする。その間も貴族たちはあっちへこっちへと甘い言葉に右往左往する。

選挙結果は，Aranka が義兄夫婦の協力のもと，候補者たちを意のままに手玉にとったことも

6）1849年までに国民劇場で39回の上演回数を数えたもっとも成功した作品のひとつといえる。地方を巡業する旅役者の劇団でも多く上演された。［Kerényi 1990: 309］また，本稿で扱った作品中，唯一今日も上演されることのある作品である。最近の例では，2016年にコマーロム，2017年にはシャルゴータリヤーンなどの都市で上演されている。

功を奏し，見事Tornyaiが当選，めでたくArankaと結婚する。2人は実は幼いころから好き合っていたのだったが，Arankaは親の命令で好きでない人と結婚し，未亡人となって戻った今，2人は結婚する約束をしていたのだった。

② **Eötvös József,『平等ばんざい（Éljen az egyenlőség）』**（1840年作，1844年初演）

Eötvös József（1813−1871）
男爵家に生まれ，早くからフランス啓蒙思想に触れる。1840年代には上院議員としてバチャーニ，テレキら貴族出身の有力議員とともに急進派勢力を形成し，封建制打倒，農奴解放，ユダヤ人解放などを要求した。1845年には農奴解放をテーマとした社会派小説『村の役人（Falu jegyzője）』を発表。小説，喜劇，同時代のフランスものの翻訳，政治社会問題に関する論考など，生涯にわたり多方面の執筆活動を行う。1848年革命政府では宗教教育大臣となり，一般義務教育の導入やユダヤ人の平等宣言等を行う。1866年に科学アカデミーの総裁，1867年アウスグライヒ時にはふたたび宗教教育大臣となる。1868年の少数民族法でユダヤ人を含めたすべての民族における市民権の平等を実現した。息子で物理学者のEötvös Loránd は1848年革命の年に生まれた。

【あらすじ】

ある村の隣同士に暮らす大貴族（伯爵），小貴族（県副知事），市民階級（弁護士）の3つの家族の物語。3人とも日頃から最近流行の平等主義者を自負している。ところが，伯爵の娘は県副知事の息子と恋仲，県副知事の娘は弁護士の息子と恋仲であるということがわかり，いざ自分たちの子供が身分の違う相手と恋に落ち結婚したいと言い出すと猛反対し，陰で互いの批判ばかりしている。

さらには，3つの家族に仕える執事，元騎兵の下男，女中などの庶民階級の人々のあいだにも身分意識があり，互いに相手から馴れ馴れしい態度をとられると「自分より身分が低い奴に仲間扱いされた」と怒りをあらわにする。大人たちは自由主義者を自称しながら，内心は互いの階級を軽蔑し犬猿の仲であるのにたいし，2組の娘・息子たちは身分の違いにはまったく目もくれず，相思相愛を成就させようとひそかに共同で作戦を練る。若い4人は知恵を絞って親たちを罠にはめ，互いに見栄を張り身分の違いを理由に結婚を拒否することができない状況に追い込み，結婚を認めさせ，ハッピーエンドとなる。

革命・平等といいながら，ありとあらゆる身分の人間が互いに忌み嫌い，排他的になっているという社会の現実を，喜劇に描いた作品である。

③ **Szigeti József『3 月の日々のある判事（Egy táblabíró márciusi napokban）』**
（1848年10月14日初演）

Szigeti József（1822–1902）
親の反対を押し切って俳優となり，19歳でGaal Józsefの人気作品『ペレシュケ村のお役人（A peleskei nótárius）』の当たり役をつかんで大成功した。1844年から半世紀の長きにわたって国民劇場で活躍した。1848年革命前はまだ目立った配役は少なかったが，50年代以降は革命と戦争で姿を消した第1世代に代わって中心的な俳優として活躍をする。同時に，「民衆もの（népszínmű）」喜劇を多数執筆し，Szigligetiに次ぐ人気劇作家として演劇界に貢献した。本作品は革命下の短期間にもかかわらず，計9回上演される大ヒットとなった[7)]。

【あらすじ】

ペシュトに住む裁判官の未亡人Patainéのところに，病気になった牧師の兄Szívesiが身を寄せる。亡夫の友人Nyakasiは長年役人を務め，そのおかげで近く貴族の称号をもらえる，その暁にはPatainéに結婚を申し込もうと狙っている。自由主義者のSzívesiは，「貴族なんて祖国に寄生しておなかいっぱいになるまで血を吸うヒルのようなものだ。」と皮肉る。一方，Patainéの息子Ákosは隣人の金細工師の娘に恋をしている。Patainéは，息子が身分の違う市民の娘に恋をしていることにショックを受け反対するが，息子は母親に反発する。

3月15日。Nyakasiが宝くじに当たり，これで貴族の身分もPatainéの心も手に入れることができると，有頂天になっている。Patainéへのプロポーズがうまくいきそうな瞬間にSzívesiが登場，妹に息子たちの恋を認めるよう説得を始める。貴族の身分に固執する旧体制派のNyakasiと，革命の信奉者で貴族打倒を主張するSzívesiの激しい言い合いが始まる。そこに，事態を心配したÁkosがやってくるが，Nyakasiが「きみのお母さんは絶対結婚を許さない」と告げると，Ákosは「市民階級の娘との恋は侮蔑的というのか。自由と平等の神よ，今こそ抑圧された人々が権利を取り戻す時だ」と叫んで家を飛び出す。町では，革命を求める市民のデモが始まり，どんどん大きくなって聞こえてくる。Ákosは街頭で人々に向かって演説。Szívesiも胸元と帽子にハンガリーの3色旗のバッジ（kokárda）をつけて，ペテーフィの詩を歌いながら入ってくる。Patainéはデモ市民の声におびえている。市民が歌うペテーフィの歌がどんどん近づいてくる。

Szívesiが2人の恋を認めるよう諭すと，Patainéは「法律が変わり，農奴は解放され，私の収入も半減したわ。息子の幸せが何より。兄さんの言う通りにするわ」とため息交じりに答え，Szívesiは「平等ばんざい」と叫ぶ。一方，Nyakasiは「貴族の身分をついに手に入れたその日に奪われた」と嘆いている。Szívesiは「あんたも幸せになるよう，あたらしい勲章をやろう。その称号は“市民”だ」と言って，その胸元に3色バッジをつけてやり，「世界は進歩する。我々

7）Pukánszkyné 1940: 164.

も進歩しよう。革命ばんざい！」と叫ぶ。Nyakasiはひとり残り，バッジを外してしげしげと眺め，「せめてこれが黒と黄色（ハプスブルクの紋章）だったら，身に着けるんだけどなあ。いや，あきらめきれない。私は反革命者になる」と叫んで退場する。

④ **Dobsa Lajos『3月15日（Március Tizenötödike）』**（1848年12月18日初演）

Dobsa Lajos（1824–1902）
ハンガリー南部の町マコーで鉄鋼業で成功し貴族の称号を得た家庭に育つが，法律を学んだのち親の反対を押し切って俳優の道へ。ペシュトで詩人ペテーフィと交友を結び，しばらく共同生活をする。俳優としての挫折からペシュトを離れ，ヨーロッパ周遊中に，1848年2月のパリで革命に遭遇。バリケード戦に参加する。3月15日時点ではまだパリだったが，5月に帰国し，パリでの革命体験を出版する。急進派新聞『3月15日』紙に執筆し，自由戦争では国民ゲリラ隊を組織し，敗戦後には半年間拘束される。50年代以降はコシュート支持の急進派として国会議員を務める一方，喜劇を中心に14作品を執筆した。
『3月15日』はこの新聞の名前をタイトルにした作品である。初演が行われたのが，ヴィンディシュグレーツ将軍率いるハプスブルク皇帝軍がペシュト入城・占拠するわずか2週間前であり，年が明けた1月早々には西部の都市デブレツェンに移動するハンガリー臨時政府を追いかけるように，国民劇場の主だった役者たちもペシュトを去ったため，たった1度きりの上演となったが大入りの成功となった。また，その急進的なタイトルの影響を恐れ，地方の劇団は上演することがなかった[8)]。

【あらすじ】

急進的革命派の新聞『3月15日』の若い記者Gejzaはウィーンからペシュトに戻る蒸汽船の甲板で若い女性Herminaに一目ぼれする。Herminaはお付きの女家庭教師Innocenciaにたしなめられながらも，その監視の目を盗んで2人は言葉を交わし，恋仲になる。

ペシュトに到着したHerminaは，さっそくハプスブルク高官である養父のPifflから，年配エリート役人Csillingに後妻として嫁ぐように命令され，むりやり婚約の準備をさせられる。Csillingの弟がパリの革命に急進派として参加し，バリケード戦で死んでしまったので，このままでは一族が途絶えるために，老齢のCsillingが跡継ぎを産ませることだけを目的とした打算の結婚である。その日の昼間に婚約，夜には結婚式という急ぎの段取りが組まれる。Csillingは実は若い頃，Innocenciaを誘惑したことがあり，この日ひょんな再会をした彼女に遠回しな嫌味を言われる。Innocenciaは「過去をばらしてあげましょうか？いやならこの契約書（金銭の要求）にサインを」とからかい混じりに脅迫。Csillingは「一族を絶滅に追い込みたいのか」と憤る。そ

8）Kerényi 1990: 359–360.

こに花嫁衣裳を着て養父のエスコートで入場したHerminaは，Gejzaのことを想い，青白い顔で沈んでいる。Gejzaが助けに現れないのならいっそ死んでしまおうと嘆く。Innocenciaはスキを見計らってちゃっかりと金銭を要求し，Csillingは苦々しく思いながらも差し出された小切手にサインする。Herminaが婚約指輪を受け取り，誓いの言葉を述べようとした瞬間，新聞の売り子に扮したGejzaが通りから「3月15日！」と新聞を売りながら飛び込んでくる。HerminaはGejzaと再会し強く抱き合う。男2人は驚き，Gejzaにとびかかろうとするが，Piffl は窓枠に首を挟まれ身動きが取れず，Csillingは隣の部屋に閉じ込められる。Herminaは気絶し，Gejzaが彼女を連れ去る。通りでは猫ばやしがけたたましく鳴り，新聞売りが「3月」「3月」と叫んでいる。

このどたばたの後，Gejzaはパリで行方不明になったCsillingの弟であることが明らかになる。パリから帰国し，名前を変えて身を隠していた事情を兄に説明する。またGejzaの親友の恋人がInnocenciaの実の娘，つまりCsillingとのあいだにできた娘であることがわかり，彼らが結婚すると財産を相続する権利があるという。事情がわかったCsillingは弟の結婚を許し，自分もInnocenciaと結婚するという。また自分の娘とその婚約者の仲も認め，自らのを含め3つの結婚を同時に祝福し，これで一族も滅びないと兄弟ともに喜ぶ。外では「ラーコーツィ行進曲」や「3月15日」の新聞売りの声がにぎやかに聞こえる。

⑤ **Obernyik Károly『ウィーン革命の中のハンガリー人亡命者（Magyar kivándorlott a bécsi forradalomban）』**（1849年6月15日初演）

Obernyik Károly（1815–1855）
カルヴァン派の牧師の家庭に生まれ，デブレツェンのコレギウムで学んだのち，詩人ケルチェイ（Kölcsey Ferenc）の館で家庭教師もした。ペテーフィが組織した若き詩人の集まり「十人会（Tízek társasága）」のひとり。革命中は，流行紙『生活模様（Életképek）』紙に執筆，また『ペシュト新聞（Pesti Hírlap）』紙の編集をコシュートから引き継ぐ。1840年代には数々の社会派劇作品を書き，検閲で出版できないこともあった。革命期には，Szigligeti Edeの『ラーコーツィ2世の幽閉（II. Rákóczi Ferenc fogsága）』とならんで本作品がもっとも上演回数の多い人気作品となった。精神的な病のため，革命や自由戦争には多くは関与しなかった。

【あらすじ】

1848年10月蜂起のウィーン。主人公Ödönは両親を早く亡くし，裕福で帝国派の親戚Torlaiが後見人となっていた。実はTorlaiの娘Klárаと両想いであるが，貧しい境遇に恋は阻まれている。しかし，祖国ハンガリーで革命が起き，もう身分違いを気にせず恋を成就することができると期待する。そこに突然，Torlaiが娘を連れてハンガリーからウィーンにやってくる。「革命

で財産を没収され身の危険を感じ，なけなしの財産を現金に換えてウィーンに逃げてきた，二度とハンガリーには戻らない，ウィーンで穏やかに余生を過ごしたい」と言う。しかし，暴動が始まり，ウィーンも平和でないという現状に気がつき，Torlaiは腹立たしく思う。

養子であるÖdönが革命思想に“侵されて”いると知ってTorlaiは驚くが，情報を探ろうと，彼の留守中に家になだれ込んで来た革命集団の若者に大いに賛成するかのように話を合わせる。若者たちはTorlaiの理解ある態度に感激し，われらの指導者になってもらおうと旗と武器を持たせ，思わぬ展開に慌てて助けを呼ぶTorlaiを連れ去って行く。Kláraは蒼くなって父を探さなければと訴えるが，Ödönは顛末を聞いて笑いが止まらない。いったん逃げ戻り，たんすに身を隠すTorlaiだが，革命の若者たちがバリケードに使う家具はないかと物色し，たんすを持ち去ろうとする。スキを見つけてTorlaiはたんすから脱出。今度は馬車に乗るが，馬車ごとバリケードに組み込まれて身動きが取れなくなり，「自由に勝るものはない，ああ，愛する自由よ」と独りごちる。

市民蜂起のバリケードの山に閉じ込められ，さらには帝国派と革命派を取り違えて，革命派とともに闘ってしまう“勘違い”貴族の姿を面白おかしく描く。娘は父を想うやさしい心と，恋人への愛のあいだで揺れ動く。ついにTorlaiは革命派の若い主人公に救い出され，娘との結婚を認める。「私はハンガリーに帰る。革命を叫ぶ若者たちもいいやつらだが，この騒ぎは早く終わらせてくれ。それではみなさんごきげんよう。娘の結婚披露宴で会いましょう」と観客に呼びかけて幕。この作品は1849年6月の上演であるが，これは前年10月のウィーン蜂起が数千人の市民の流血とともに惨敗してから半年以上も経っており，さらにこの時期ハンガリーでは革命政府は追いつめられ，苦しい戦況の只中にあった。しかし，本作品はウィーン革命を革命派が優勢となって闘っているところまでを描いており，まるでそのような厳しい現実からは目を背けたような，不可思議なまでに楽天的な内容となっている。

4．作品の特徴

4.1．革命期特有の“風物”を多用

5つの作品には，以下に挙げるような1848年革命に特有の，いわば革命の風物といえる話題がひんぱんに登場する。

1）korteskedés「選挙運動」：村人たちが徒党を組んで，韻を踏んだ歌を歌いながら選挙戦の候補者を褒め称えたりけなしたりする（作品①，②）。

2）barrikád, torlasz「バリケード」：パリ2月革命（作品④）とウィーン10月革命（作品⑤）に言及して登場。作品⑤ではバリケードがおもな舞台装置として利用されている。

3）macskazene「猫ばやし」：1848年のパリに始まり，ウィーン，ペシュトへと伝播した（charivari, Katzenmusik）。権力者・政治家の家の下で，民衆が夜を徹して鍋釜をはげしく叩きながら抗

議の意味で大騒ぎすること。作品中では，ラッパ，笛，kereplő[9]，カウベル，鈴などを首から下げるか手に持ち，革命扇動家が創作した皮肉・揶揄などの言葉を大声で繰り返す（作品④）。

4）革命や対ハプスブルク抵抗運動を象徴する歌が挿入される。Nemzeti dal「（ペテーフィの）国民の歌」[10]，Rákóczi-induló「ラーコーツィ行進曲」[11]，「ラ・マルセイエーズ」など（作品③，④）。

5）革命中に続々刊行された新聞の名前が繰り返し登場する。
「3月15日（Március Tizenötödike）」，「猫ばやし（Charivari）」[12]，「ラディカル（Radikál）」，「民衆の力（Népelem）」などが売り子のかけ声として登場する（作品④）[13]。

6）kokárda「3色旗バッジ」：ハンガリー国旗の色である赤白緑のリボンで作り，革命期に多くの市民が胸につけてハンガリーの独立を主張した（作品③，④）。

4.2. 登場人物の構図

作品の登場人物たちは，年齢や身分，職業，思想などに関連して，以下のように大きく2つの対立するカテゴリーに分けられる。

「若きヒーロー・ヒロイン」vs.「中高年」
「孤児・養子」vs.「養父」
「下級役人」vs.「県副知事」
「市民」vs.「貴族」
「自由・進歩主義者」vs.「保守・伝統主義者」
「共和主義者」vs.「封建主義者」
「革命派」vs.「帝国派」

主人公とその恋人は，多くの場合，若く貧しく，弱い立場（例えば親を亡くしたり，養子または養女）となっている。対する相手は，中年または高齢の男で，裕福で高い地位にある（主

9）持ち手がついた木製の道具で，振り回すと非常に大きな音がする。従来は家畜の群れを追う時に用いたが，カーニバルの際，これでやかましい音を立てて集団で練り歩くようになった［Magyar néprajzi lexikon］。

10）1848年3月15日朝，12カ条の要求とともに，検閲を通さず印刷され配られた刊行物の第1号となった詩。革命中にさまざまな音楽が付され歌われた。

11）18世紀初頭ハンガリー貴族ラーコーツィ2世が率いた対ハプスブルク抵抗運動とその不幸な結末を嘆く内容で，民衆の中で伝承されていたものであるが，1840年代には作曲家ベルリオーズの作った行進曲としても知られていた［Magyar néprajzi lexikon］。

12）流行紙 Életképek の付録紙で，政治諷刺の娯楽紙であった。本紙の編集責任を任されたヨーカイ（Jókai Mór）がおもに執筆を担当し，革命の進行とともに本紙記事以上にこの諷刺記事の執筆に全力を注いだ。

13）それまで新聞は郵送による定期購読の形態しかなかったが，1848年革命期に初めて路上で売り子がかけ声とともに売るやり方が始まった［Szabolcs: 53–54］。

人公の養父，貴族など)。単純で対象的な人物構図で成り立ち，観客は困難なく登場人物の力関係や政治的志向を把握することができ，同時に主人公のサイドに感情移入するように導かれているともいえる。

しかし，多くの場合，「正義の味方」である主人公は「自由平等の理想へ邁進する」「貧しい民衆は善であり保守派貴族は絶対悪」といった単線的な言動に終始し，人物の描写にあまり深みがあるとはいえない。それに対し，「悪役」のほうが老齢・頑固で欲深く狡猾な人物であるにもかかわらず，完全な悪役にはなりきれず，ドジで微笑ましく憎めないキャラクターを作りだしている。最後はあっさりと自らの非を認め大団円を迎えるように立ち回る重要な役割を担い，喜劇としての作品の成功のカギが託されている。役者としての力量がもっとも要求されるのもまた，このような人物像であると想像できる。実際に喜劇作家として成功した作品③の作者Szigetiや，19世紀を通してもっとも活躍した喜劇作家Szigligetiは，本人たち自身，このような役どころを特に得意とする俳優であった。

4.3. カリカチュアライズされた登場人物

いくつかの作品では，人物にその特徴をあらわす意味の名前をつけ，カリカチュア的な効果を持たせている。

作品①では，美しいヒロインがAranka「黄金」，その洗練された賢い恋人がTornyai「塔（すなわち高い＝高潔)」を意味する一方で，悪どい保守派知事にはFarkasfalvi「オオカミ」，同じく恋敵である急進的すぎる政治家にはHeves「熱血」という名前が与えられている。またヒロインの義理の兄で，女の尻を追ってばかりのちょっと間抜けな町医者はLangyos「生ぬるい」という名前である。

作品③では，物語の主要な役割を担う自由主義者の牧師がSzívesi「心優しい人」というのに対し，女主人公に言い寄り，貴族の地位に長年執着する小役人はNyakasi「しつこい奴」である。

作品④のヒロインを傍らで助ける中年女家庭教師はInnocencia「純潔」で，これは若い頃の恋を忘れず独身を貫いていることを示している。それに対し，ヒロインの政略結婚に奔走する養父である老貴族はPiffl「威張り屋」であり，その結婚相手で女好き，しかも過去の女に振り回されるCsillingは「チリンチリン」という擬音語で，軽薄な人物像を表し，音感としても昨今の日本語の俗語である「チャラ男」のイメージに近いだろう。

その他には，ユダヤ人の宿屋の主人がSchnapsというが（作品①)，これはアルコール度の高い蒸留酒の名前であり，酒造が近代中東欧のユダヤ人の典型的な職業のひとつであったことからきている。

人間の特性を一語で表したこのような名前のつけ方は，笑いを誘い，また単純化した誰が見てもわかりやすいステレオタイプを生み出す。同時に，こうして「定番化」して提示された登場人物に，観客は現実世界の具体的な人物を容易に重ねることができ，諷刺の効果をよりいっ

そう強めているといえる。

5．政治喜劇における対立構造

5つの作品に共通するのは，階級間の対立および政治思想の対立が中心的テーマとなっていることである。これは，4.2.で述べた登場人物の構図にもわかりやすく表れていた。以下では，このような階級の対立が作品中にどのように描かれているかを，例を挙げて見てみることにする。

5.1．社会階級の対立

まず，作品①では地方小貴族たちが大貴族との平等を求める一方，農民の権利については大反対するようすが描かれる。激しい選挙戦が繰り広げられる地方の町に，辺鄙な田舎の貧しい小貴族らがほこりっぽいあぜ道を遠路遥々やってくる。保守派の現職副知事に対し，今回の選挙では急進派の対立候補に投票するという。その政党のスローガンは「平等ばんざい」であり，小貴族らは「私たち小貴族も伯爵と同じ人間」であるし，「牛2頭の［貧相な］車よりも4頭立て馬車に乗りたい」と訴え，「大貴族よりも小貴族のほうがずっと数が多い」のだからと一見民主主義的な主張をする。これに対し副知事は「しかし，農民の数はそれよりずっと多い。奴らは小貴族だけでなく農民もみな平等にするつもりだ。そして小貴族も税金を払わねばならなくすると言っているぞ」と釘を刺す。すると，小貴族らは「なんだって。絶対払わないぞ。借金も返さない。我々は税金を払わないからこそ貴族なんだ」「われらは一国一城の主。ユダヤ人が借金の請求に来た時には，殴って追い返してやったぞ」と息巻き，農民の権利は認めようとしない。そこに付け入った副知事が「議会では，民主主義を推進する改革派は小貴族の票を取り込んで，結局農民が一番得をする改革をしようとしているのだ。だって農民の数が一番多いのだからね」と一見合理的な説得を続けると，小貴族らは「我々は何としても金を出さないぞ。農民と同列になるなんてもってのほか」と考えを翻し，やはり現職に投票すると約束するという場面が描かれる（2幕2場）。

作品②では，大貴族・小貴族・市民階級のそれぞれが互いを軽蔑し合う。大貴族である伯爵は普段から平等主義者を自称するが，自分の娘と小貴族の息子との仲を知ると，その両親について「やつらは自由主義を声高に言いながら，自分の嫁があわよくば伯爵夫人だったらと願っている。わしはよくわかっているんだ」と蔑視的な解釈をする。そして，「今は平等の世紀だからな。われらの崇高な思想も，小貴族の息子が大貴族の娘をめとれないんだったら何の意味があろう？」と平等主義者らしい理解を見せたかと思うと，そのあとには「お前たち［小貴族］の自由主義なんぞ見抜いているぞ。自分より上に立つ人間はあっというまに風に吹き飛ばされるふわふわした役に立たない雲，自分より下の人間は足で踏みつける砂埃，自分たちこそ偉く

気高くて，他の者はすべて劣ると思っているのだろう」と猜疑心をあらわにする（1幕5場）。市民階級である弁護士もまた，自分の息子が小貴族（県副知事をしている）の娘を好きなのに，その親が2人の結婚を認めないことに憤慨する。「自由思想の持主である副知事が［庶民の子からの］プロポーズを断るんだったら，他の県に居場所を探すんだな」と，息子のプロポーズを認めないなら次の選挙で妨害・落選させるキャンペーンを行うことを匂わせる（2幕7場）。

このような大人たちのいがみ合いを見て，伯爵の息子 Vilmos はあきれ，「誰もが自分では思想だと思い，かつ他人からは偏見と呼ばれるものをもっている」「自由主義なんて，行動と言動が一致しなければ，何の意味があるだろう！」と嘆く（2幕9場）。

この作品では，上述した3つの家族の階級間対立を主なプロットとしながら，これと並行して，それぞれの館に仕える下男たちもまたケンカを繰り広げる様子が描かれている。伯爵家の下男（inas）に「あんた（kend）」と馴れ馴れしく呼ばれたことで，副知事の下男は憤慨する。彼はかつてハプスブルク帝国軍に奉仕した騎兵（huszár）であり，自分の方が身分が上だと考えているのである。元騎兵が「あんたが俺をあんたと呼ぶんだったら，なんで俺があんたをあんたと呼んで悪い？」と言い返すが，相手はさらに「賊兵（hajdú）」さらには「殴り合いの名人（ütlegvirtuóz）」と畳みかけ，際限のない罵声のかけあいとなる。副知事の執事がケンカを聞きつけ，「あんたらも階級争いか？」と皮肉ると，元騎兵は「リベラルな下男は騎兵よりも偉いと思っていやがる」と悪態をつく（3幕1，2場）。このように，貴族や市民階級の人間はおろか，はたから見る限り身分の差とはいえないような下男同士にいたるまで，あらゆる階級の人間が互いを蔑視しいがみ合う様子が面白おかしく描写されている。

作品③でもまた，平等を受け入れられない様子が描かれている。貴族に憧れる小役人が床屋やユダヤ人金貸しに「市民」と呼ばれて激怒するが，ここでも相手をどう呼ぶかが諍いのもととなり，同時に笑いの要素となっている。未亡人に恋心を抱く Nyakasi（「しつこい奴」）は30年の役所勤めの末，ついに貴族の称号を得られたまさにその日（3月15日）に革命が起こり，貴族になるという夢に破れた上に，床屋とユダヤ人金貸しに次々と“平等扱い”される。以下は，床屋とユダヤ人金貸しが立て続けにやってきて，彼を「市民同志（polgártárs）」と呼ぶことに憤慨する場面である。

Nyakasi「貴様，誰に口をきいていると思う？」

床屋　「あなたですよ，市民同志」

Nyakasi「何だと，私が市民同志？お前と同じ市民同志か？怒髪天を衝くわ。（略）怒りで爆発するわ」

床屋　「なんでです？革命以来，私らみんな市民同志ですぜ」

Nyakasi「うそだ。仕立て屋，靴屋，床屋は仲間だ，市民だ。しかし私は由緒ある貴族の県役人だ」

床屋　「そして市民！」

Nyakasi「ちがう！床屋の皮を着た悪魔め，それ以上言うと地獄だぞ。市民同志だと。私は石鹸を喰う

床屋の仲間か！この世も末だ！」（3幕6場）

次にユダヤ人の金貸しが来て，また呼びかけをめぐって言い合いが始まる。

Nyakasi 「誰に用だ？」

ユダヤ人「あなたですよ，市民同志」

Nyakasi 「地獄に堕ちるわ！（気絶する）」

ユダヤ人「ああ，市民同志！どうしました，しっかりして下さい，市民同志！（略）すみません，今はみんな市民同志って呼び合いますもんで。でもそれはどうでもいいんです。ただ，ツケを払っていただこうと思って…」

Nyakasi 「わしは払わん。…（略）…一万回ツケを踏み倒しても，わしは貴族でいるぞ」

ユダヤ人「払ってくれれば旦那様とお呼びしましょう。でも払わないんでしたら…」

Nyakasi 「だったら？え？だったら？」

ユダヤ人「ペチョヴィチ[14)]って呼びましょう」

Nyakasi 「えい，死んじまえ！階級の違いを教えてやるわ」（杖を振り回す）

ユダヤ人「おかしなことを言いましたかね？待ってください，ちゃんとツケを払ってくれなかったら，訴えて逮捕して刑務所に入れてもらいますよ。だって今はみな平等ですからね」

Nyakasi 「このユダヤめ！」

ユダヤ人「市民同志！」

Nyakasi 「悪人！」

ユダヤ人「役人！」

Nyakasi 「死んじまえ！」

ユダヤ人「ペチョヴィチ！」（3幕7場）

貴族階級への“上昇志向”の強いNyakasiは，床屋や金貸しから“同等の身分”を象徴する「市民同志」と呼ばれ，激怒する。後者の場面は“ユダヤ人”に対する民族差別と捉えるよりも，貴族階級に対して下位に位置づけられた金貸し業者にたいする侮蔑として描かれている。ツケを平気で踏み倒そうとする貴族の態度は，前述の作品①における小貴族の態度と共通するものであり，免税などの特権に甘んずる貴族階級の傲慢な行動を批判し揶揄するものである。

これとは別に，作品①ではユダヤ人解放に言及する場面がある。ユダヤ人の宿屋主人Schnapsはハンガリー人客の罵りに対し，「それがどうした。この前の議会以来，ユダヤ人は犬っころじゃなくて平等な人間になったんだ」とやり返す（2幕2場）。また，この宿に投宿している改革派の対立候補の妨害をするよう，一番悪い酒と焦げた料理を出すよう現職副知事に強要され，

14）ペチョヴィチ（Pecsovics）は，革命時ハプスブルク政府側の政治家の名前で，帝国派を蔑視して使われた俗語。

「あの人はわしに言いました。もしうちの政党が勝ったら，ド貧民のユダヤ人も国民みんなと平等にするってね。あれは悪人じゃない，すばらしい洗練されたお方だ」「あんたの頼みは呑めない。わしは貧しいユダヤ人として解放のために力になりたいんじゃ。あんたがいつも議会で解放反対を唱えていたことは忘れんからな」と反撃する（2幕2場）。1840年のハンガリー議会でユダヤ人の諸権利が法制化され[15]，1849年7月にハンガリー臨時政府によってユダヤ人がすべての民族と同等な市民権を持つとするユダヤ人解放令が施行される[16]。この作品はそのはざまの時期である1842年に発表されたが，ユダヤ人の地位をめぐる状況が変化しつつあるさまが臨場感をもって描かれている。

5.2. 政治的思想の対立

政治喜劇に見られるもう一つの対立構造は，政治的な考え方の対立である。特に，革命の勃発後に書かれた作品③④⑤では，登場人物のあいだの政治思想の対立がクローズアップされ，明快に描かれている。

作品③では，女主人公の兄である牧師は急進的な革命派，それに対して彼女に言い寄る小役人はハプスブルク派の保守主義者で，両者の激しい政治的議論が延々と続く。牧師は「農民らが血と汗を流して労働し貧しさにあえいでいる間に，貴族のほとんどはただで生きている」「貴族とは，祖国の胸にぶら下がっておなかいっぱいにその血を吸ったら眠くなって落っこちて，傷口から血が流れ続けるのを放っておくヒル以外の何者でもない」（2幕6場）といった貴族階級を批判するセリフを次々と叫ぶ。また，女主人公の息子とその恋人の“身分違いの恋”を擁護し，妹を説得して2人の結婚を認めさせる。

作品④では，主人公は急進的革命派新聞の記者をしている若者で，その恋人はハプスブルク派貴族の養女であり，同じく保守貴族の後妻にされようとするところを救出する。作品⑤の主人公もウィーンで革命派の運動に参加している親を亡くした貧しい若者で，後見人であるハプスブルク派貴族の娘と恋仲という，よく似た設定である。いずれも主人公は革命派であり善人，そして身分違いの恋という障害を乗り越えようとし，それに対して主人公らの恋愛を阻む悪人は政治的保守主義者，ハプスブルク派貴族である。政治思想と恋愛という2つのテーマを対立構造の中に組み込み，革命の達成と恋愛の成就を重要な2つのプロットとして同時並行に描くという点で，これらの作品は共通した構造を持っている。

このように見ると，1848年革命期の政治喜劇においては，実は民族問題はテーマとなっていないことがわかる。革命期のハンガリー王国では，封建制打倒や農奴制の廃止による市民社会が実現されれば，国内の少数民族は自発的にハンガリー化するであろうと見込んだリベラル派

15）国内のユダヤ人の居住・商業生産活動・土地取得の権利を認めたもので，ユダヤ人解放の最初の一歩となった。［Gergely: 213, Pajkossy: 142–3］

16）Pajkossy: 339.

ハンガリー人政治家らと，より踏み込んだ民族的自治や将来的な民族独立・統一を希求した諸民族との大きな溝が，結果としてハンガリーの市民革命の遂行を阻む決定的な要因となった[17]。しかし，この複雑で困難な民族問題は，本作品群の中ではまったくといっていいほど関心の内に入ってこない。より正確に言いかえれば，諸民族は近代革命を達成したハンガリーに内包されるべき国民に他ならず，民族問題はアプリオリに存在しないとされているということができるだろう。

むしろ，これらの作品では階級差の問題と対立が明確に設定されている。「市民的平等」という理想を掲げる革命支持派であっても，実際はみな互いの階級を軽蔑し融和しようとしない。作者らは，このような社会の現実を市民革命の実現を阻む深刻な問題であると捉え，警鐘を鳴らしたのである。それを，あえて風刺とユーモアで包んで人々に提示することによって，より効果的に訴えることができたといえよう。

ただし，そこには地方の農民や都市の工場労働者はあらわれず，専ら貴族と都市市民階級のあいだの争いのみが描かれている。その理由として，ハンガリー革命自体がリベラル派貴族と都市の市民階級が主導して展開したこと，そしてこの時期に演劇作品を享受した観客もまた多くが都市部市民階級であったことからも，そこに関心が集約されたことが考えられる。良知はウィーン革命史の研究において，“市民”への仲間入りも許されなかった多くの非ドイツ系移民や工場労働者がじつは「市民革命」の中で一番多くの血を流し、それにも関わらず，歴史にみずからの爪痕も残せない事実をあぶり出した[18]。近代社会の最下層を占める，記録されない「歴史の中の声なき人々」の存在は，同時代演劇文学が描く風景からもまた取り残されたことがわかる。

6．まとめにかえて　～理念と現実のギャップを描くリアリズム

1848年革命期の政治喜劇は，革命後の政治的反動化の中で禁止されたことからも，革命という時代限定的なテーマであったことからも，後世ほとんどその存在を忘れ去られてしまった。本稿で扱った5人の作家は，ハンガリー文学史においても周辺的な存在に甘んじていることは否めない。それでは，これらの作品がハンガリー文学史の中でもつ意味や位置づけとはいったい何であろうか？

劇作品としてこれらを批評するなら，人物像にはたいした深みがなく，プロットの展開は予定調和的な和解やハッピーエンドなど喜劇ならではの単純なものであり，また革命期の混乱の中で急ごしらえで書かれたために細部に粗削りなものが残るなど，文学作品として高い質を誇

17）1848年ハンガリー革命の少数民族問題については，Kosáry 1999: 114–121を参照。

18）良知：264ページ。

れるとはいいがたい[19)]。

実際，政治喜劇は，恋愛喜劇という娯楽性が高く人々に受容されやすい器に流し込んだ革命派の政治的プロパガンダという側面もある。作者各々は作品執筆のかたわら，新聞記者として（Nagy, Obernyik），国防軍兵士として（Dobsa），国会議員（Eötvös, Dobsa）として，ハンガリー市民革命に参加した。劇作家兼俳優に専心したSzigetiもまた，直接革命に関与しなかったものの，国民劇場でいわばハンガリー独立を訴える広告塔的な役割を担った。ただし，既述したように，その関心は都市市民層にのみ向けられ，少数民族問題や農民問題といった革命が内包した諸問題に関与することはほとんどないという点で限定的でもある。

しかし，以上のことから，文学史においてこれらの作品に意味がないとするのは拙速であろう。同時代フランスのスクリーブやオーストリアのネストロイの喜劇に見られるように，ハンガリーの政治喜劇もまた市民社会をビーダーマイアー調の軽妙さで描きつつ，社会変革へと人々を喚起する。ロマン主義的抒情詩を中心に発展した近代ハンガリー文学の中で，これらの政治喜劇は不十分ながらも本質的な社会問題を指摘し描写した点において際立っている。ハンガリーでは19世紀末の小説文学で本格的となるリアリズム文学であるが，これらの政治喜劇はロマン主義の中にも時代をさきがけるリアリズム的要素を内包するものであると評価することができる。

参考文献

Bényei Miklós（1985），*Reformkori országgyűlések színházi vitái（1825–1848）*. Színháztörténeti Könyvtár 15.

Bíró Lajos Pál（1931），*A Nemzeti Színház története 1837–1841*. Pfeifer F. kiadása. Budapest, 1931.

Fülöp Géza（1993），*Olvasók, könyvek, könyvtárak* I. Magyar médiapedagógiai műhely. Budapest.

Gergely András（szerk.）（2003），*Magyarország története a 19. században*. Osiris kiadó.

Gintli Tibor（főszerk.）（2010），*Magyar irodalom*. Akadémiai kiadó.

Gyulai Pál（1873），Nemzeti Színház（Szigligeti és újabb színművei）. *Budapesti Szemle*, 3. sz.

Hofer-Kerényi-Magyar-Székely（1987），*A Nemzeti Színház 150 éve.* Gondolat.

Horváth János（1927），*A magyar irodalmi népiesség Faluditól Petőfig.* 2. kiad. 1978. Akadémiai kiadó.

Kéky Lajos（1937），A Nemzeti Színház első művész-nemzedéke. Különnyomat a *Budapesti Szemléből*, 129–158.

Kerényi Ferenc（1980），A nemzeti színház és közönsége（1845–1848）. *ItK.* 428–444.

――（1987），*A vándorszínészettől a Nemzeti Színházig.* Szépirodalmi könyvkiadó, Budapest.

19）Gintliは作品①および②に言及し，観客に作品と現実を同一視させ，時代を描写する力を持っていたことを評価する一方，時代の流れとともに作品のこの機能が失われ，単なる喜劇になってしまったと述べている［Gintli: 606–8］。

—— (1987), Dokumentumok. A Nemzeti Színház. 1987.

—— (szerk.) (1990), *Magyar színháztörténet 1790−1873*. I. köt. Akadémiai kiadó.

—— (2004), A színház mint társaséleti színtér a 19. századi Budapesten. *Budapesti negyed.* 46.

Kósa László (szerk.) (2000), *Magyar művelődéstörténet*. 2. kiad. Osiris kiadó.

Kosáry Domokos (1999), *Magyarország és a nemzetközi politika 1848−1849−ben*. História.

Korompay H. János (1980), A „Népköltészet"-től a népiességig. *ItK*. 84. évf. 3. 285−309.

Kovács Magda (1970), Fejezetek a cenzúra reformkori történetéből. In Lukács-Varga (szerk.) *Petőfi és kora.* Akadémiai kiadó.

Lugosi Döme Kálmán (1927), *Kelemen László és az első „Magyar játszó színi társaság"*. Makó.

Mályuszné Császár Edit (1980a), *A nemzeti színjátszás kezdetei közép-kelet Európában.* Budapest.

Mályusz, Császár Edit (1980b), *The Theater and National Awakening.* Atlanta.

Mérei Gyula (szerk.) (1908), *Magyarország története 1790−1848,* Akadémiai kiadó.

Osváth Béla (1962), A Nemzeti Színház és a magyar dráma. *ItK*. 64. évf. 6. sz. 693−704.

Pajkossy Gábor (szerk.) (2003), *Magyarország története a 19. században. Szöveggyűjtemény.* Osiris.

Paulay Ede (1885), Drámairodalmunk a Nemzeti Színház megnyitása óta. *A Kisfaludy-társaság évlapjai,* 18. köt. 1883−84. Budapest, Franklin-társulat.

Pukánszkyné Kádár Jolán (1940), *A Nemzeti Színház százéves története.* I/II. köt. A magyar történelmi társulat. Budapest.

Rédey Tivadar (1937), *A Nemzeti Színház története. Az első félszázad.* Királyi magyar egyetemi nyomda.

Sőtér István (főszerk.) (1965), *A magyar irodalom története 1772−től 1849−ig,* III. köt. Akadémiai kiadó.

Staud Géza (válogatta) (1989), *77 ismeretlen dokmentum a régi Nemzeti Színházból (1838−1885).* Múzsák.

Szabolcs (főszerk.) (1985), *Magyar sajtó története II/1. 1848−1867*. Akadémiai kiadó.

Széchenyi István (1832), *Magyar játékszinrül.* Pest. http://mek.oszk.hu/09700/09707/index.phtml

Székely György (főszerk.) (1990), *Magyar színháztörténet*. I. köt. 1790−1873. Akadémiai kiadó.

Székely József (1887), *Magyar játékszín: A nemzeti színház félszázados ünnepélye.*

Szigligeti Ede (1878), *Magyar színészek életrajzai.* Budapest.

Szilágyi Márton (2013), Egy vígjáték politika és irodalom metszéspontján. Eötvös József: Éljen az egyenlőség. *Irodalomtörténet.* 94. évf. 4.sz.

生田眞人（2004）『ウィーンの演劇と検閲』郁文堂

岡本真理（2013）「王たちから農民へ―ハンガリー国民文学運動のなかのヒーローたち」，野村泰幸編『ヨーロッパ・ことばと文化』大阪大学出版会，85−102.

——（2016）「近代ハンガリーにおける国民演劇運動の発展―国民劇場の黎明期―」『言語文化

研究』第42号。43–60.
ネストロイ研究会編（1996）『ウィーンの茶番劇』同学社
良知力（1978）『向こう岸からの世界史　一つの一八四八年革命史論』未来社